

2024/7/7

ルカの福音書 講解メッセージ⑬

『ルカの福音書 5章 27-39節 新しい皮袋について』

■取税人に目を留めた理由

「この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人に目を留めて、「わたしについて来なさい」と言われた。するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかに大ぜいの人たちが食卓に着いていた。すると、パリサイ人やその派の律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって、つぶやいて言った。「なぜ、あなたがたは、取税人や罪人どもといっしょに飲み食いするのですか。」」（ルカ 5:27-30）

この人は、マタイです。マタイが、イエス様につき従ったのは、すでに神にとらえられていたからです。信じるとは、従うということです。従うところに自由があるのです。

当時の取税人は、税を取り立てて人々を苦しめる、現代のヤクザに近い存在です。そういう人たちとは交わらないのが当時の常識だったので、パリサイ人たちは、イエス様が彼らと交わっていたことにつまずき、このような罪人と交わるイエスは、偽預言者だと非難しているのです。今も昔も、このように、私たちは、行いで人の価値を判断するものです。しかし、イエス様は次のように言われました。

「そこで、イエスは答えて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」」（ルカ 5:31-32）

人は、罪人との交わりを避け、非難します。しかし、イエス様は、罪人は病人と同じだから、いやされることを願うべきだというのです。それには、理由があります。

私たちが悪いことをしてしまうのは、神に愛されている自分が見えないからです。これは、悪魔のしわざによって死が入り込んだ結果です。人は神からいのちを与えられ、神という土台を持っていながら神が確認できません。人が死に対して恐怖を覚えるのは、神という永遠を知っているからです。人が自由を求めるのは、神という自由

を知っているからです。人が愛されないと不安になるのは、神という愛を知っているからです。私たちは神のいのちが吹き込まれて造られ、神という土台の上に生かされているにもかかわらず、神が確認できないので、誰もがその不安を感じています。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がりました。その結果、全人類が罪を犯すようになったのです。」（ローマ 5:12）

（※ 従来の訳では、下線の箇所が、「それというのも全人類が罪を犯したからです。」となっていましたが、最新の研究によって「その結果、全人類が罪を犯すようになった」と理解すべきだという議論がなされています。）

「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」（ローマ 5:21）

罪は、死によって人を支配するようになりました。死とは分離です。死によって神と分離されて、神の愛も永遠も見えなくなり、不安になったために、人は見える安心をむさぼるようになりました。これが罪の行為です。人は誰もが罪人で、誰もが死んでいます。神を認識できない死の体を持っているのです。だから聖書は、この状態を「罪人・死人」と呼びます。

つまり、人が悪い行いをしたり、悪い思いを抱いたりする原因は、すべて死が入り込んだことによるのです。死は外から入り込んだウィルスのようなものです。だから、罪は病気だというのです。

しかし、パリサイ人たちは、このことがわかりませんでした。自分たちは義人だと思い込んでいたからです。

■永遠のいのちという分母

「彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは、よく断食をしており、祈りもしています。また、パリサイ人の弟子たちも同じなのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」イエスは彼らに言われた。「花婿がいっしょにいるのに、花婿につき添う友だちに断食させしかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」」（ルカ 5:33-35）

あくまで行いで人を判断するパリサイ人たちに、イエス様は、このように語られました。花婿とはイエス様のことです。聖書は、神と私たちの関係を、花婿と花嫁にたとえています。

「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもつて、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。」（ホセア 2:19-20）

花婿と花嫁というたとえは、どちらが男か女かが重要なのではなく、神と私たちは夫婦のように一つになった存在だということです。夫婦になったとは、お互いの財産を共有するようになったということです。私たちの持っている財産は負債です。死という借金です。その負債をイエス・キリストは背負ってくださったのです。そして、私たちは神の財産を手にしました。それは、永遠のいのちです。

「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」（コロサイ 2:14）

「しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなさったのですか。』父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」（ルカ 15:29-32）

このたとえ話に出てくる兄は、永遠のいのちの富がわかつていませんでした。

この世界で、私たちの人生は有限でしたが、キリストと一つになったことによって、人生は永遠になりました。永遠のいのちによって、この世の富も苦しみも比較できないほど取るに足らないものになったのです。たとえば、この世界では、1億と1万と100の富の大きさを比べることができますが、分母を「無限」という数の分数にしたら、それらの違いはほとんどありません。同様に私たちの苦しみの大きさを比較した

としても、永遠という分母で考えれば、ほぼ違いはありません。私たちの罪も苦しみも、永遠の前では一瞬です。そして、ただ、そのことを通してキリストと出会うことができたという「今」が残るのです。

人は、人生を重ねるほど、細かい出来事は思い出になり、いちいち数えるようなことはしなくなります。同様に、神はあなたの苦しみを永遠のいのちで解決したのです。

神が私たちの罪を赦すのは、神が永遠だからです。永遠なる神にとって、私たちの人生の中の罪は点であり、無に等しいものです。同様に、苦しみも永遠という分母の中では、一瞬であり、それは、神を知る架け橋になったという一つの出来事に変わります。

それまでの分母は自分の年齢でしたが、永遠のいのちという分母を手にしたことによって、人生の意味は 180 度変わってしまったのです。

ところが、私たちは、神から永遠のいのちを着せられているにもかかわらず、未だに有限というものさしだけで考えてしまします。それが問題なのです。それでは永遠のいのちがもったいないです。

■新しいぶどう酒は新しい皮袋に

「イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい着物から布切れを引き裂いて、古い着物に継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、その新しい着物を裂くことになるし、また新しいのを引き裂いた継ぎ切れも、古い物には合わないので。」」（ルカ 5:36）

新しい着物とは、イエス・キリストであり、永遠のいのちです。キリストを信じた者はすでに永遠のいのちを神からいただき、永遠を着たのです。それにもかかわらず、古い着物、有限の着物である自分の年で人生を見るなら、せっかくの永遠のいのちを無駄にしてしまいます。

自分の苦しみを数え、自分の苦労を数えることで、何が生まれるでしょうか。何も生まれません。そんなものは神が与えた永遠のいのちと比べれば、無と等しい取るに足らないものです。この世界でどんなに金持ちになろうが、どんなに貧しかろうが、神の前では同じです。どんなにがんばって高い塔を建てようとも、この世界からは永遠の世界にいけません。

しかし、私たちはもう神の国に入れられており、人生の分母はイエス・キリストになりました。つまり、永遠が分母になったのです。ですから、新しい着物に古い着物

を接ぎ合わせたりしたら、せっかくの新しい着物を台無しにするように、いつまでも古い生き方をしていては、永遠のいのちが台無しです。

「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」（ガラテヤ 3:27）

「また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。」（ルカ 5:37-38）

これは、体制を一新するというような意味ではありません。新しい葡萄酒とは永遠のいのちであり、イエス・キリストのことです。古い革袋とは、人生を自分の年齢で見る古い生き方のことです。その生き方を変えないでイエス・キリストを信じて生きていくことが、新しい葡萄酒を古い革袋に入れるということです。

イエス・キリストという新しい葡萄酒を飲んだのだから、心を一新させて、イエス・キリストを土台とし、永遠のいのちという分母で、世の中を見るのです。そうすれば風景が変わります。今見ている風景はすべて幻であって、消え去るものです。苦しみが続くとか、苦しみが終わらないとかいうのはうそです。永遠という分母によって、苦しみは何回あろうが1回であり、大きさにも差がなくなります。それが神の国です。

神の国は何時間働くかこうが、1回働いたことにしかなりません。イエス様のブドウ園のたとえ話は、そのことを教えています。朝早くから働いた人も、昼からの人も、午後3時からの人も、夕方から働いた人も、賃金をもらう時には、皆1デナリでした。それは、永遠という分母の前には、8時間も5時間も1時間も差がないからです。この世界では差がありますが、神の国は永遠ですから、差がないのです。神の前には、有限の世界はすべて瞬間であり、1回です。永遠の中の点なのです。

人は能力を見て、人の価値を判断しますが、永遠の前では全部同じで差がありません。皆生きるものです。だから、皆、神から同じものを受け取るのです。頑張った、頑張らなかったにかかわらず、誰もが神に愛されているということです。

あなたの人生の分母は、有限から永遠になり、あなたの苦しみ、苦労は、全部点になったから、イエス様は、「明日のことは明日が思いわずらう」「苦労はその日1日で十分だ」と言っておられるのです。あなたを支えているのは、有限の死の体や、数えられるいのちの年数ではなく、永遠のいのちです。永遠のいのちをいただいた時点で、すべての問題は神によって解決されているのです。永遠を分母として生きる新しい生

き方をしていきなさいと教えられているのです。

「また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物は良い』と言うのです。」（ルカ 5:39）

今までの生き方をしている人は、このままでいいと言うでしょう。これは、パリサイ人たちに対する言葉です。彼らは成功し、自分の人生に満足していました。それならそのままで生きなさいと言っているのです。なぜなら、そのままにしても、やがてどうにもならない苦しみに出会い、その時には、イエス様の言葉が分かるようになるからです。

イエス様は、心の貧しい者は幸いだと言い、今幸せだと楽しんでいる人は災いだと言われました。それは、古い葡萄酒で満足している人は、新しい葡萄酒を飲もうとはしないからです。古い生き方で満足している人は、イエス・キリストを受け入れることができません。

あなたが、苦しみの中でイエス・キリストと出会い、イエス・キリストを受け入れたということは、永遠のいのちを持ち、分母が変わったということです。だから、心を一新して、新しい分母で世界を見なさいと、言われているのです。

■心の一新によって自分を変えるとは

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」（ローマ 12:2）

「心の一新によって自分を変える」とは、分母を永遠のいのちにすることによって、自分を変えるということであり、肉によって生きるのではなく、神のことばによって生きるようになるということです。

分母が無限になったら、何を分子に持ってきてても、答えは同じです。あなたの人生の分母は永遠のいのちになったので、見えるところがどんなものであろうとも、答えは変わらないのです。お金持ちであろうが、貧しくなろうが、どんなに苦しもうが、どんなに喜ぼうが、永遠のいのちの前では、一瞬の点です。だから、聖書は「思い煩うな」と教えているのです。この世は全部消えていく幻だからです。そして、この世界は、あなたに対して何もできません。神があなたにいのちを与えた以上、この世界

の何ものも、それを奪うことはできないのです。だから、何も心配するなど聖書は教えているのです。私たちには、今の苦しみが長いように見えるかもしれません、永遠という物差しでは一瞬のことなのです。

聖書が、「忍耐」という言葉を使うのは、忍耐して待てば、必ずそのことがわかるからです。この世を去って天国に行った瞬間、すべてが益となるとはこのことか、とわかるのです。永遠のいのちが与えられたことによってすべてが益となって、天国に行くときには、悲しみも涙もありません。永遠の前では、すべてがゼロと等しくなり、消えてなくなるからです。だから、神は、あなたの罪を二度と思い出さないと言ったのです。ゼロのものを思い出しようがないからです。ですから、私たちは自分の罪に対して、くよくよする必要はありません。神と共に生きているという希望を持って生きていくことができます。これが、心の一新によって自分を変えるということです。この世と調子を合わせないとはこの世の見方に染まってはいけないということです。この世の見方は真実ではありません。幻を追いかけて一喜一憂しても何の意味もないのです。いつまでも残るものに心を留めて生きていく、それが新しいぶどう酒は新しい革袋にということの意味です。